

韓国における国際仏教学術会議

—金知見博士主催の大会と3か国学術会議の比較—

佐藤 厚*

1 はじめに

本稿の目的は、中国・韓国・日本3か国仏教学術会議（以下3か国会議）の最終回にあたり、1970年代末から90年代初にかけて韓国で開催された、金知見（1931-2001）博士主催の国際仏教学術会議を振り返り、3か国会議と比較して、国際会議の内容の変化を考察することである。

金知見博士は韓国の東国大学校を卒業した後、日本の駒澤大学、東京大学に学び、日本の研究者、とくに中村元博士、鎌田茂雄博士らと交流し、その人脈をもとに1970年代後半から80年代にかけて主に韓国仏教の人物や思想をとりあげた国際学術会議を主催し、韓国仏教の世界化に貢献すると同時に国際交流にも尽くした。金知見博士の会議から約40年が経ち、2010年代に開催された3か国会議がどのような特徴があるのかを考察したい。

2 金知見博士の略歴

金知見博士は1931年に韓国全羅南道靈岩郡で生まれた。1960年に東国大学校仏教学科を卒業後、1963年（32歳）に東国大学校大学院修士課程修了した。その後、日本に渡り、1967年（36歳）には駒澤大学大学院の博士課程を満期退学し、続いて東京大学大学院に進み、1971年（40歳）には東京大学大学院の博士課程満期退学、1973年（42歳）に「新羅華嚴思想の研究」で博士学位を取得した。そして東国大学校の助教授となったほか、1976年

*東洋大学東洋学研究所客員研究員。

(45歳)には私設の研究所である大韓伝統仏教研究院を設立した。翌年の1977年(46歳)には研究院から『均如大師華嚴学全書』を刊行し、その翌年1978年(47歳)に第1回の国際仏教学学術会議を開催した。この学術会議が今回の話の中心となる。

その後、1983年(52歳)には江原大学校教授となり、1989年からは韓国精神文化研究院の教授となった。1997年(66歳)に韓国精神文化研究院を停年退任した後、来日して1999年(68歳)からは日本国際文化研究センターの客員教授を務めていた。そして2001年に70歳で逝去した。

専攻は華嚴思想と禅を中心とした韓国仏教全般であった。

3 金知見博士主催の国際学術会議とその役割

金知見博士主催の国際学術会議は、次の12回が開催された。

第1回(1978年) 均如大師と華嚴思想

第2回(1979年) 元暁思想

第3回(1980年) 義湘の華嚴思想

第4回(1981年) 華嚴思想と禅門

第5回(1982年) アジア仏教の源流

第6回(1984年) 知訥の世界

第7回(1986年) 西山の思想

第8回(1987年) 元暁聖師の哲学世界

第9回(1989年) 『六祖壇経』の世界

第10回(1991年) アジアにおける華嚴の位相

第11回(1993年) 羅・唐仏教の再証明

第12回(1996年) 道誥の再証明

テーマを見ると、人物を中心とする回や広いテーマを扱う回があることがわかる。

以下、学術会議の背景と実際の学会について見ていく。

3-1 国際学術会議の背景

1978年、第一回目の学術会議のテーマは「均如大師と華嚴思想」である。これは高麗時代の華嚴僧侶・均如（923-973）を中心に置いた学術会議であるが、この年にこのテーマが開催されるには理由があった。

均如の著作は智儼（602-668）、義相（625-702）、法蔵（643-712）の3者の著作への注釈である。これは新羅の義相を中心として、その師匠である智儼、そして弟子である法蔵という関係にある。現存するものに5種類のテキストがあるが、これは海印寺にある高麗大蔵經の補版に収録されていた。よって、これは一般には目にすることがなかったが、1977年、金知見博士が『均如大師華嚴学全書』を刊行することにより誰でも見ることができるようになった。

これを受けて同年から東京大学の鎌田茂雄博士が、均如の著作の中、法蔵『五教章』に対する注釈である『積華嚴教分記円通鈔』の読書会を始め、これに華嚴学専攻の吉津宜英博士や石井公成博士などが参加した。このように韓国仏教の著作が日本で研究されたことは韓国でも反響を呼び、当時の新聞では、「日本の学会でも均如研究ブーム」として伝えられている。（右写真は1977年10月5日（京郷新聞））

また、同年の日本印度学仏教学会では、鎌田茂雄「高麗均如の華嚴学」をはじめ、均如あるいは均如に関連する発表が相次いだ¹。

おそらく、こうしたことを受けて金知見博士は均如を中心とした国際学術会議を構想したのだと考える。



3-2 国際学術会議

では具体的に会議を見ていく。

・第1回

第1回の主題は「均如大師と華嚴思想」であり、1978年10月28日から31日まで4日間、ソウル世宗文化会館で開催された。発表者は、韓国が9名（金知見、金煥泰、李鶴洙、李鍾益、徐首先、金忠烈、呑虚、性徹、九山）、日本が3名（古田紹欽、鎌田茂雄、木村清孝）、中国（台湾）が1名（張曼濤）であった。



양분된 華嚴敎學 통일시켜

この時の金知見博士の基調講演は次の通りである。（1978年10月30日付『毎日経済』）

本日は、東洋三国の碩学が集まり、均如大師誕生1055年周忌法祝として「均如の華嚴思想」を主題として学術大会を開催する意義深い日です。華嚴思想は東洋文化の神髄であり、韓国仏教は華嚴思想を除いては考えられないほど、これを崇めてきました。わが民族の総量、すなわち心量と物量を作り上げてきました。華嚴思想の特徴は個体の独自性が認証されればされるほど、相互関係をなすところにある。それはすべての雑多な存在の共存を認定、融和と連帯を目標とすることです。

均如の華嚴思想は、ただ聖職者的な寺院と僧侶の専有物でないだけでなく、微妙な華嚴の道理を高麗民衆の心の中に根付かせたものであり、それは彼が遺した郷歌に残り伝わっています。今日の学術会議の意義は、均如の偉大であった仏教人としての真の姿を華嚴学を中心と

して、関連ある学問をなされた碩学たちが照明することにあります。

今回の会議は、発表の後に討論会を華嚴寺・双溪寺・松広寺へと場所を移して、先師たちの香りが残る聖地で自由討論をいたします。同じ仏教文化圏で成長した東洋三国が、華嚴思想に立脚して友誼を分かち、世界平和の基礎をつくりあげるのに精進することを祈念いたします。(前頁写真は1978年10月30日付『東亜日報』)

・第2回

第2回(1979年)は元暁思想がテーマで、発表者は韓国が6名(金知見、趙明基、金夏雨、金恒培、呉成煥、申賢淑)、日本が3名(横超慧日、鎌田茂雄、木村清孝)、中国(台湾)が1名(張曼濤)であった。とくにこの時は、韓国では失われ、日本にだけ残っていた元暁の『判比量論』、『二障義』写本が韓国で公開され、話題を呼んだ。(次頁写真は1979年11月9日付『朝鮮日報』)

・第3回(1980年)

第3回は「義湘の華嚴思想」と題し、日本の京都で開催された。発表者は17名である。韓国が7名(金知見、趙明基、閔泳珪、韓基斗、呉成煥、金鎬然、朴性培)、日本が8名(中村元、神田喜一郎、玉城康四郎、古田紹欽、鎌田茂雄、中井真孝、小林実玄、木村清孝)、中国(台湾)が1名(張曼濤)、米国が1名(R.Gimello)であった。

この時のプログラムを見ると、発表は1人あたり30分で、初日午前発表3名、午後発表8名、二日目午前発表6名、午後総合討論となっている。

・意義

以上、3回までの内容について見てきた。ここでこれまで見てきたこの国際学術大会の役割を考えてみたい。一言でいえば、「韓国仏教の世界化」であろう。それはまず、世界の学者に韓国仏教が研究する意義があるもの

であることを知らせること、そして実際にそれを世界の学者が集まって研究発表を行うことである。

これが可能だったのが、金知見博士が主に日本で培った人脈であり、中でも鎌田茂雄博士はほとんど毎回参加している。鎌田茂雄博士は東アジアにおける韓国仏教の独自性を認め、日本における韓国仏教研究の基礎を作った人物である²。そして、そこで重要な役割を果たしたのが均如のテキストである。1977年に金知見博士が均如のテキストを公刊したのが、国際的な研究のきっかけとなったのである。

4 国際学術会議の内容の変化

続いて2012年以来続いてきた、3か国会議を振り返り、金知見博士の学会との内容の変化を考えてみたい。3か国会議の大テーマは「仏教の東アジア的受容と変容」ということで、次の9回が行われた。

第1回：2012年6月：韓国（ソウル、フェラムタワー）

- ・〔テーマ〕 東アジアにおける仏性・如来蔵思想の受容と変容
第2回：2013年6月：中国（北京、人民大学）
- ・〔テーマ〕 南北朝時代の仏教研究
第3回：2014年6月：日本（東京、東洋大学）
- ・〔テーマ〕 東アジア仏教における対立と論争
第4回：2015年6月：韓国（公州、百濟歴史文化館）
- ・〔テーマ〕 東アジア仏教における『大乘起信論』観
第5回：2016年6月：中国（北京、人民大学）
- ・〔テーマ〕 仏教と伝統思想
第6回：2017年6月-7月：日本（東京、東洋大学）
- ・〔テーマ〕 東アジアにおける禪仏教の思想と意義
第7回：2018年6月-7月：韓国（ソウル、韓国仏教歴史文化館）
- ・〔テーマ〕 敦煌写本と仏教学
第8回：2019年6月：中国（北京、人民大学）
- ・〔テーマ〕 疑偽経と東アジア仏教
第9回：2020年6月：日本（予定：東洋大学）*コロナ感染症流行によりメール会議
- ・〔テーマ〕 東アジアにおける生活軌範：戒律・大乘戒・清規・非僧非俗

これをもとに金知見博士の会議との違いを述べてみたい。

第一に、大テーマについてである。金知見博士の場合は、前述したように、「韓国仏教の世界化」が大テーマだったと考えられる。つまり韓国仏教を世界に知らせ、学術的な重要性や関心を持ってもらうことが中心である。それに対して3か国学術会議の場合は「仏教の東アジア的受容と変容」がテーマであり、中国、韓国、日本が共通して属している東アジアという視点から仏教を捉えていくことが特徴である。ここにアジアの仏教研究を個別の国ではなく東アジアという領域で捉えていこうとする視点の変化が

ある。

第二に、毎回の小テーマである。金知見博士の場合は、半分が韓国仏教の人物、すなわち均如、元暁、義相、知訥、西山、道誥であり、そのほかは思想、あるいは歴史、である。それに対して3か国学術会議の場合は、思想が2回（第1回、第6回）、典籍が1回（第4回）、時代が1回（第2回）、特別テーマが5回（第3回、第5回、第7回、第8回、第9回）である。小テーマは開催校が計画するものであるが、どの国の立場からの研究が可能なように設定され、他国への配慮が窺われるものである。

第三は開催形式である。金知見博士の場合は「韓国仏教の世界化」だったこともあり、主催という立場であった。それに対して3か国学術会議の場合は毎年交替する共同開催である。

第四は発表者の数である。金知見博士の場合は発表者の平均が18名くらいであったが、3か国学術会議の場合は10名くらいとなっている。これは1名あたりの持ち時間が長くなり、それだけ議論が深まる効果があったと考えられる。

第五は国際環境の変化である。金知見博士の場合は韓国と日本が中心で、中国は、最初は台湾の学者が参加し、途中から大陸の学者が参加するようになった。一方、3か国学術会議の場合は、大陸の学者が中心となっている。

第六は通信環境の変化である。金知見博士の場合はインターネットが存在しなかった時代なので対面しかなかったが、3か国学術会議の場合はインターネットが存在し、オンラインでも会議を開催できるようになった。また、インターネットの登場によって仏教学のありかたも変化したことがいえる。

5 まとめを代えて

以上、本稿では金知見博士が主催した学術大会を振り返り、それに3か

国学会議を合わせて考えてみた。時代や国の状況に応じて国際学会議の在り方も変わってくるのがわかった。

最後に、学会の効果について一言する。国際学会の目的は、あるテーマについて各国から研究者が集まり、情報を交換してその分野の発展に努めることと同時に、後学に対して研究を促し、将来的な研究の発展の準備をすることも大事なことであると考え。そうした効果は目には見えにくいものであるが、時間が経ってから現れるものもある。1990年代の後半、日本と韓国で、均如を主題として博士論文を書いた者が3人現れた。韓国の金天鶴（金知見博士の弟子）、崔鉛植、そして私である。私の場合、鎌田先生が始めた読書会に1990年代半ばから参加させていただいた。このような例は、広く言えば学会の成果が次世代につながった例と考えられる。ここから、私たちが積み重ねてきた3か国学会の成果も将来、新たな研究者の研究業績につながることを予想され、またそうなるように祈る。

【参考文献】

梁銀容「国際仏教学術会議と金知見博士」（『東と西』、民族社、1991年）

【注】

- 1 その他の発表は、吉津宜英「高麗均如の華嚴典籍について」、金知見「高麗均如著述の資料的価値性について」、中條道昭「朝鮮華嚴文献より見た智儼の伝記」、結城令聞「華嚴章疏の日本伝来の諸説批判—特に五教章について」。
- 2 鎌田茂雄「私はほぼ十年来、数年の有志とともに高麗の均如の『積華嚴五教章円通鈔』を読み進めていた。その過程で明らかになったことは、華嚴教学においても、そこに独自の教義解釈がなされていることであった。こうして私の見るところ、朝鮮における仏教は中国仏教とは異質な独特なものであり、その内容は朝鮮仏教と表現する以外にないことを確信するに至ったのである。」（『朝鮮仏教史』東京大学出版会、1987年、i-ii）

佐藤厚氏の発表論文に対するコメント

張 雪松*著・伊吹 敦**訳

筆者は、先輩の学者、金知見博士とお会いすることはできなかったが、その高弟である金天鶴教授とは交流を重ねてきており、金天鶴教授の姿から金知見博士の風格を窺うことができました。また同時に、筆者は中国・日本・韓国の三箇国において三国学術会議に参加する機会に恵まれました。従って、佐藤厚先生の「韓国における国際仏教学学術会議—金知見博士主催の大会と三か国学術会議の比較」を読んで非常に身近に感じましたし、多くのことを学ばせて頂きました。

例えば、筆者は中国の台湾地区の著名な仏教学者である張曼濤（早くに湖南の南岳で出家し、法名は青松、長春とも名乗った）が編集した多くの仏教学術叢書を読んできましたが、佐藤先生の論文によって彼が何度も韓国に行き国際学術会議に参加したことを初めて知りました。筆者はかつて、1981年の始めに張曼濤が自ら創刊した『亜洲仏教週報』と日本の『中外日報』、韓国の『仏教新聞』という三紙を中心に、香港、マレーシア、シンガポール、タイ等の東南アジア各国の仏教新聞をも含めて、第1回の「アジア仏教文化交流会議」を開催したということに注目したことがありました。ただ、残念なことに張曼濤はその年に亡くなってしまいましたが、張曼濤が生前に何度も韓国に赴き、金知見博士が主催した国際仏教学学術会議に参加したということは、当時のアジア各地域の仏教交流を十全に理解するうえで非常に重要な意義を持つものです。

佐藤先生の論文は、韓国仏教界で開催された二種類の国際会議をただ単

*中国人民大学仏教与宗教理論研究所教授。

**東洋大学文学部教授。

に比較するだけのものではなく、二十世紀の七十年代後半以降、東アジアの経済が活況を迎え、社会や文化が大発展を遂げた後、韓国で開催された国際会議の主体が個人から団体に変わり、一国から三箇国へと拡大していったことを示しています。この進歩は、形式上の拡大に止まるものではなく、内容的にもその都度、より深いものになっていきました。つまり、「韓国仏教の世界化」から始まって、「東アジア仏教」という視点に立った仏教の統一的理解へと進み、また、韓国の仏教思想家の思想研究から始まって、「東アジア仏教」の教学、テキスト、戒律、時代性等のあらゆる方面にわたる研究へと進んだのです。

筆者が佐藤先生にお訊きしたい質問は、以下の二つです。

1. 御存知のように、現在の三国会議では、毎回、論文集が中国、日本、韓国で刊行されていますが、金知見博士が主催した会議の論文集の出版状況については、どこにその関係資料を見ることができるのでしょうか、佐藤先生に御紹介頂ければ有り難いです。
2. 佐藤先生は論文の中で、金知見博士と彼が開催した国際学術会議が世界の学術界における均如研究を推進する役割を果たしたことを特に強調しています。修士の時に筆者が指導した甘沁鑫（現在は西南交通大学の中国宗教研究センターで教えている）は、東国大学の金天鶴教授の指導のもとで均如に関する博士論文を書きました。よく知られているように、李永洙の「均如大師伝の研究」の上、中、下、一、二がそれぞれ『東洋学研究』の7号、8号、13号、18号（1973、1974、1979、1984年）に発表され、金知見編『如均大師華嚴学全書』上、下（大韓伝統仏教研究院出版委員会、1977年）が日本の学者の注目を集め、その後、鎌田茂雄編の「釈華嚴教分記円通鈔の註釈的研究」と題する一連の論文が『東京大学東洋文化研究所紀要』（1981、1982、1984、1987年）に発表され、

また、吉津宜英による続篇が『華嚴学研究』（1988、1991年）に発表されました。そこで、佐藤先生に高麗華嚴宗の代表的人物である均如の初期の研究史について包括的な紹介をして頂ければと思います。そうすれば、金知見博士および彼が主催した国際会議が果たした均如研究史における具体的な位置づけと役割を明らかにすることができると思うからです。

ご静聴、ありがとうございました。

張雪松氏のコメントに対する回答

佐藤 厚*

1 学会の論文集の刊行について

論文集は数冊だけ刊行されています。ただ韓国語版だけなので、日本人や中国人は読むのが難しいです。10数回に及ぶ学会の概要は、参考文献に挙げた梁銀容先生の論文に整理されているので、これだけでも日本語、中国語に翻訳して、仏教学の国際学術交流の歴史を共有するのが良いと思います。

2 均如の研究史について

張先生の指摘のように、均如の研究は1970年代から始まりました。李泳洙先生、金知見先生の研究は、書誌的な問題や均如の活動に関する基礎的な研究でありました。教学に関する本格的な研究は1980年代に入って始まりました。中でも鎌田茂雄先生が華嚴研究者を集めて始めた訳註作業は大きな成果を生みました。特に吉津宜英先生により教判論の特徴を指摘したのは韓国華嚴の独自性を主張する上でも重要な研究でした。

1990年代に入り、私、韓国の金天鶴先生、崔鉦植先生の三人が研究を活発に行い、それぞれ均如で博士論文を書きました。私は新羅の義相から均如に至る華嚴思想の流れに関心を持ち、教判論、教理論の二つに分けて研究しました。金天鶴先生は特に機根論を中心に研究を行いました。崔鉦植先生は教判論を中心に研究を行いました。

*東洋大学東洋学研究所客員研究員。

その後、韓国で数名、均如で博士論文を書きました。張先生が紹介した甘先生もその一人で均如の教学背景についての重要な研究を行いました。余談ですが甘先生は東洋大学にも在学したことがあり、私の授業に出席しました。とても優秀な学生でした。

10世紀に活動した均如は東アジア華嚴学の上でも重要な人物です。将来的に私たちがやらなければならない仕事は五教章の比較研究です。五教章の注釈で残っているのは、日本の寿靈の指事、凝然の通路記、韓国の均如の円通鈔、中国の道亭（亭）らの注釈ですが、これらを比較することにより、東アジアの華嚴学の展開、影響、そして各地域の独自性を知ることができます。この作業の必要性は昔、鎌田茂雄先生が主張されましたが、中国、韓国、日本で研究者が育った今後の課題として交流しながらやっていかなければならないと思います。ありがとうございました。